



北方民族博物館だより

No.78



E30 トナカイ皮製手袋（ウイルタ）長さ23.5cm 幅12.0cm
樺太／敷香（オタス）収集

当館にはウイルタの手袋が三種類収蔵されています。ひとつは写真のような二またの手袋、そして、親指と人差し指とその他の指にわかれている手袋、そして五本指の手袋です。

二またの手袋はウイルタ語でマンバックカといいます。五本指の手袋に対してはコトプトゥとタルバキの二つの言葉があります。

写真の資料はトナカイ革に赤糸等で刺繍がほどこされています。

- 1 表紙 トナカイ皮製手袋
- 2-4 特別展「トナカイのパーカとアザラシのブーツ」
- 4 アイヌ文化講習会「樹皮糸でストラップづくり」／サハリンの少数民族ウイルタの文化調査
- 5 北海道博物館紀行「紋別市立博物館」／移動展示「イヌイトの壁掛けと楽しい玩具」
- 6 INFORMATION



第25特別展

『トナカイのパーカとアザラシのブーツ：北方の衣文化をさぐる』

2010.7.17-10.17

今年の特別展は、北方の衣文化を見つめ直そうとするもので、北の先住民が伝えてきた衣類の素材や形、その機能や製作技術などの特徴について、世界の他の地域の衣類とも比較しながら紹介しました。

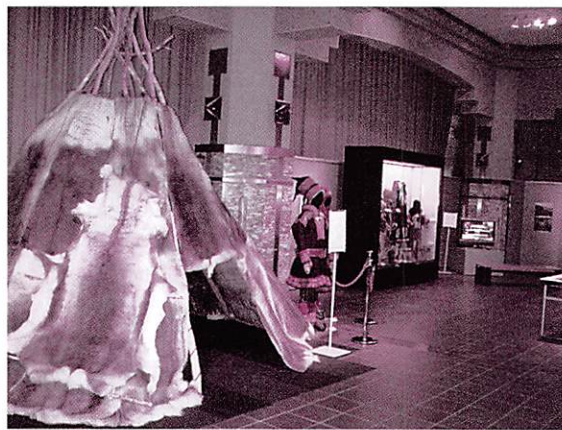
まず、世界の衣類の形については腰布型、垂巻型、貫頭型、前開型、体形型といったタイプに分類されていること、素材は温暖な地域では主に植物性繊維が用いられ、寒冷地では一般に動物の皮が利用されていることなどを概説しました。そして、大きな一枚の布を縫製せずに体にまとう型の衣類の代表として、インドの「サリー」とインドネシアの「ヒンギ」を展示しました。また、台湾では、高地の民族（タイヤル）と南の離島の民族（ヤミ）とでは、環境によって衣類が全く異なることも紹介しました。さらに、貫頭型の代表的なものでもあり、現在も伝統的な衣装を継承しているグアテマラのマヤの人びとの衣類も展示しました。これらの衣服を着用している様子や、布を織る様子など現地の写真も展示しました。こうした北方地域以外の衣装はすべて、東京家政大学博物館から資料を借用させていただきました。



次に、アイヌの伝統的な衣類アットゥシと履物などを紹介しました。アットゥシは、ニレ科の樹木オヒョウの皮を糸にして織り上げた布および、それを着物様に仕立てた衣類をさすアイヌ語です。ここでは織りかけた状態の機も展示し、間近でご覧いただきました。北海道とサハリンにくらしてきたアイヌの人びとの衣文化は、植物性の布を主な衣服の素材とする北限に当たります。これより北の寒冷地では、毛皮やなめし革、モンゴルなどで用いられてきたフェルトが主要な衣服の素材となっています。

以上のような導入の展示の後、タイトルに挙げたトナカイとアザラシに代表される毛皮を利用した衣類を中心に、地域ごとに紹介をしました。

展示室中央には、フィンランドの先住民サミのトナカイ毛皮製テントを建てました。北欧にくらすサミの中には、主にトナカイ飼育をしてきた人びとがおり、かつては移動生活が基本で、テントは必需品でした。現在は、定住する村からオートバイやスノーモービルなどで放牧地まで行くことができるようになり、テントも布製の簡易なものになってきているなか、展示したテントは15年前に復元的に製作されたものです。傍には、テントが製作された地域からは若干離れているものの、同じフィンランド内のサミの民族衣装を展示しました。サミの衣装は、古くから西ヨーロッパの布製品がもたらされていたことから、上衣には色鮮やかな布がふんだんに使われていますが、ズボンや^{きやはん}脚絆、ブーツにはトナカイの毛皮が用いられています。



本展では、トナカイ飼育をするコリヤークの資料で、使い込んだテントのカバー（覆い）を素材にした夏の衣類（帽子と手袋）を展示しました。テントの中で火を焚くためカバーはよく燻煙され、また毛が抜けて柔らかくなっており、衣類に適した状態になるのです。こうしたリサイクルの事例は、コリヤーク以外の民族にも知られています。

シベリアではトナカイ飼育をしてきた民族が多く、その毛皮は生活のあらゆる物に使われています。西シベリアのネネツ、北東シベリアのマガダン州からカムチャツカ地域にくらしてきたコリヤークの衣類も多く展示しました。トナカイ毛皮は部位によって使い分けられ、脚の毛皮はブーツや手袋に、頭の毛皮は帽子に、腹や背中の中毛皮が上衣に用いられるなど、「トナカイが着ていたとおりに」人間の衣類に仕立てられることが多いのです。それは、毛皮の性質にも合っています。

新大陸側では、アラスカ、カナダ、グリーンランドにく

らしてきたイヌイト（エスキモー）の衣類を展示しました。特別展のポスターやチラシに使用した写真のトナカイ毛皮製パーカは、アラスカのエスキモー（イヌピアック）のもので、タイトルのパーカ（英語でparka／日本語ではパーカーと表記されることが多い）は、フードのついた被り型の上衣のことで、体で暖められた空気が首元から抜け出ることのないよう、頭まですっぽりと覆うことができる防寒性の高い服です。アリューシャン列島のアリュートやイヌイト（エスキモー）の典型的な上衣で、ロシア人がこれらをパルカ（парка）と呼び、普及した言葉とされています。ちなみにアノラックはイヌイト語です。

ここでは、ジリスの毛皮や羽の付いた海鳥の皮を数十枚剥ぎ合わせた、アラスカのパーカも展示しました。鳥の皮は軽くて暖かく、水にも強いので、トナカイの少ない島嶼部などでよく用いられる素材でした。また、やはりアラスカのもので、海獣（アザラシなど）の腸を素材とした防水性の高いパーカも展示しました。



その他の毛皮（獣皮）以外の素材としては、アムール河流域の民族であるナナイの魚皮製の衣類も紹介しました。北海道のアイヌはサケの皮で靴を作り、樺太アイヌには魚皮製の上着がありました。豊富に得られた魚の皮は、よく鞣めすとしなやかで防水性も高く、衣類に適した素材だったのでしょう。

衣類のみならず、それを作るための道具類もご覧いただきました。まず大事なのが、スクレイパーなどの鞣めし具です。動物の生皮は腐りやすいように硬直しやすく、剥いだままでは使えません。そのため、腐りやすい成分を取り除き、腐りにくい線維組織だけを残し、さらに線維間の隙間を媒剤などで埋めるなどして、強度と柔軟性を持たせます。この作業工程全体を、日本語では広義に「鞣めし」と

言います。当館にはコリヤークの鞣めし具が複数所蔵されており、それは太めのめん棒ほどの木製の柄の中心に、鞣めしの工程に応じて、石や鉄などでできた刃を付け替えて使うものです。染料であり媒剤の役目も果たすミヤマハンノキの樹皮や、それを塗り込む作業の様子の写真も展示しました。

また、女性の持ち物として大切にされてきた針入れも紹介しました。北方で多く用いられてきたのは、筒状の入れ物で、その中に針を刺した皮（や布）を通して、針が折れないように保管するものです。サミ、コリヤーク、アイヌ、イヌイトと民族は違っても、同じタイプの針入れが使われています。皮を縫う時には力が要りますので、指貫も必需品で、角や骨あるいは厚手の皮で作られた指貫を、針入れに吊下げておけるようになっているものも少なくありません。その他に、糸として用いる腱なども近くに置き、ご覧いただきました。

さらに、北方の動物の毛の性質についても、紹介しました。北海道大学の元教授である近藤敬治氏に、走査電子顕微鏡写真を提供いただき、毛の構造や密度などが動物によって異なることをわかりやすく解説しました。

トナカイの毛は、その髄に「気室」と呼ばれる多くの空洞があり、空気をためこんでいるため、保温性にすぐれています。暖かく、大きな毛皮が得られ、しかもその肉は食料に適していることから、トナカイは北方にくらす人びとにとって、大変重要な動物でした。

一方、靴(特に靴底)には、丈夫で水に強いアザラシ皮がよく使われました。アザラシの毛には髄がなく、その分、強度があります。さらにアザラシ皮は、水を入れる容器の素材にも用いられるほど、防水性が高いものです。北にくらしてきた人びとは、こうした毛皮の種類を巧みに使い分けていました。

また、ラッコやクロテンは毛の密度が高く、毛皮が良質なことで知られていますが、その肉は食用に適さず、先住民は毛皮もあまり利用しませんでした。しかし、ヨーロッパや中国などではこれらの動物の毛皮需要が高まり、ロシアは16世紀ころから次第にシベリアに進出し、先住民たちを毛皮取引に取り込んでゆきました。北米では、イギリス資本のハドソン湾会社をはじめ、ヨーロッパの交易者らがその覇権を争いました。世界的な毛皮取引により、北方地域の歴史は大きく変化していったのです。これらの毛皮獣や取引活動についても、写真等で紹介しました。

本文に挙げさせていただいた以外にも、多くの機関および個人に資料や写真、情報等のご提供をいただき、特別展を開催することができました。心よりお礼申し上げます。まだ会期を残していますが、多くの方々にご覧いただければ、幸いです。（学芸グループ 齋藤玲子）

北海道博物館協会50周年事業

アイヌ文化講習会 「樹皮糸でストラップづくり」

講師 遠山サキ氏（アイヌ文化伝承者）

8月21日

今回も、以前ご指導いただいた浦河町在住のアイヌ文化伝承者・遠山サキ氏と遠山氏の三女・堀悦子氏に、ストラップづくりを教えてくださいました。

アイヌ民族は、縄やゴザ編みの糸などにシナノキ樹皮を利用してきました。シナノキ繊維の利用は古く、本州でも布の素材に使われてきました。アイヌのりびとは、衣類には柔らかいオヒョウ樹皮を主に用い、丈夫なシナノキ樹皮は主に結束用に使ってきたようです。

今回は、剥いだ樹皮の内皮部分を煮て水にさらし、乾燥の後、細く割いた状態で持ってきていただきました。また、魔除けとして利用されてきたイケマの根を、長さ1cmほどに切り、少し皮をむいて中央に穴をあけ、ビーズ状に形を整えたものも作っていただきました。



参加者はまず、基本の糸縫り（アイヌ語でカエカ）を教わり、2本の繊維を縫って40cmの糸を2本作りました。2本の糸の中央を曲げて輪にし、4本を平たく組んでいく組み紐の技法で、途中にアクセントとなるガラスビーズとイケマの根を編み込みました。参加者の皆さんはコツをつかむのがうまく、予定よりも早く仕上げることができました。

作業の合間に、遠山さん親娘のアットゥシ織りなどを取材した本やビデオなどもご覧いただき、樹皮の処理の仕方などについての質疑応答も行なわれました。伝統的な材料と技法を用いながら、現代風にアレンジされたストラップは好評で、さっそく携帯電話に付けて帰った方もいらっしゃいました。
(学芸グループ 齋藤玲子)

調査・研究

『サハリン少数民族ウイлтаの 文化調査』

8月7日～8月11日

5日間と短い日程でしたが、ロシア連邦サハリン州のユジノサハリンスク市において、ウイлта文化に関する調査を行いました。

サハリン北部にあるノグリキ市在住のE.ビビコワさんとI.フェジャエワさんから、ウイлтаの切り文様について教えてくださいました。ウイлтаの切り文様は、紙製の場合は刺繍の型として作られるものです。これまでに収集してきたサハリン島南部出身者の切り文様と比較し、文様の伝播やひいてはウイлтаの歴



切り文様を作るビビコワさん

史的な移動のことなども考えてゆきたいと考えています。

サハリン州郷土博物館では、館長でウイлта文化研究者でもあるT.ローン館長から、同博物館が収集しているサハリンの少数民族の写真を多数見せて頂きました。日本ではサハリン島南部で撮影されたもののほうが圧倒的に多く残されているため、北部の様子は興味深いものです。ウイлтаのものはあまりありませんでしたが、ニブフの様子には大陸の影響を見ることができました。このほか古いウイлта語の録音（物語や歌）を聞かせていただきました。

同館は、昭和10年代に樺太庁博物館であった建物が使われています。外構の整備がすすみ、さらに敷地自体も広がったということで、ニブフやアイヌの復元住居等の屋外展示もできていました。館内も改装され、ウイлта文化の展示コーナーも、ずいぶん変化があり、樺太庁博物館の面影もうすれつつあるようです。

なお本調査は岡田基金により実施しました。

(学芸グループ 笹倉いる美)

北海道博物館協会50周事業

北海道博物館紀行 紋別市立博物館 オホーツク式土器づくり

講師 こつがい 小番宗幸氏
(紋別市立博物館学芸員)

2010.9.4 & 9.18

恒例となった北海道博物館紀行ですが、今年度は紋別市立博物館の取り組みについて、小番宗幸学芸員を講師にお迎えしご紹介いただきました。講座は「オホーツク式土器づくり」ですから、粘土で土器を成形する作陶作業と後日、野焼きによって土器を完成させる2日の日程で実施しました。

オホーツク式土器づくりはオホーツク文化人が土器をつくる際に行ったと考えられるさまざまな工夫を体験することでもあり、作陶作業をしながら多くのことを学ぶことができました。オホーツク文化人はロクロを使わなかったと考えられていますが、イタドリの葉を底部に敷くことでロクロの代わりになることや、オホーツク式土器に特有の細いひも状の文様の施し方の推測など、謎解きに満ちた解説を堪能することができました。

作陶から2週間後の9月18日、いよいよ野焼きにより土器の完成をめざしました。あいにく朝から雨天のため、道立オホーツク公園内の屋根付きのバーベキューコーナーを使用した「野焼き」となり、焼成はさらにむずかしいものとなってしまいました。それでも、博物館に展示されているオホーツク文化人の土器には及びませんが、個性的なオホーツク式土器が完成しました。

(学芸グループ 渡部 裕)



野焼き

移動展示

イヌイトの壁掛けと楽しい玩具 石狩市民図書館

2010.9.4-9.19



当館では、広く博物館資料を利用していただきたいと考え、石狩市教育委員会との共催で、石狩市民図書館を会場にした移動展示を企画しました。展示は、石狩市がカナダのキャンベルリバー市と姉妹都市であることから、カナダのイヌイトの壁掛けと玩具をテーマとしました。

石狩市とキャンベルリバー市は、サケが縁で交流を始め、昭和58年に姉妹都市となりました。以来、友好協会が主体になって高校生の交換留学事業や青少年少女親善訪問事業を行い、これまで多くの青少年が海を渡り、友好を深め国際感覚を身に付けています。

北方民族博物館が所蔵するイヌイトの壁掛けは、コレクターの岩崎昌子さんの旧蔵資料です。イヌイトの壁掛けは、防寒着の材料となるダッフル地に様々な文様に切り抜かれたフェルトをアップリケし、さらに刺繍をほどこしたもので、主にカナダ極北地方で作られています。多彩な色合いと、ぬくもり感のある素材が独特の印象を与えています。題材には、イヌイトをとりまく自然環境や動物、日常生活、世界観、幾何学文様などがとりあげられます。近年は特に、シャマニズムや神話世界を表したものが好まれています。

最終日には、当館オリジナルキットを使っの「カナダの先住民族イヌイトのヨーヨー作り」を開催しました。

この展示を通して当館の存在を初めて知ったという感想もみられました。今後も当館では、移動展示の開催を予定しています。

(学芸グループ 笹倉いる美)

第25回 北方民族文化シンポジウム 「現代社会と先住民文化：観光、芸術から考える②」

時代とともに変化する先住民の文化とそれをとりまく社会。今回は、「伝統」と「非伝統」をキーワードに、芸術の変遷と今後の可能性をさぐり、現代社会と先住民との関係を考えます。国内外の関係者による事例報告、研究発表、討論を行います。

◇シンポジウム 平成22年10月16日(土)・17日(日) 9:30～16:00 (大会議室)

◇上映会「北極のナヌー」平成22年10月14日(木) 18:30～20:00 (エコーホール)

■会 場 オホーツク・文化交流センター (エコーセンター2000)
(網走市北2条西3丁目/電話 0152-43-3704)

＜発表者＞

スタン・ベヴァン氏 (ノースウェスト・コミュニティ・カレッジ、F. ディーキング北西海岸美術学校/カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州テラス市)
クリスティン・ラロンド氏 (カナダ国立美術館/カナダ、オンタリオ州オタワ市)
浅川 泰氏 (北海道立近代美術館/北海道札幌市)

床 州生氏 (アイヌ木彫作家/北海道釧路市阿寒町)
貝澤 珠美氏 (デザイナー/北海道札幌市)
大村 敬一氏 (大阪大学大学院/大阪府豊中市)
坂巻 正美氏 (北海道教育大学岩見沢校/北海道岩見沢市)
窪田 幸子氏 (神戸大学大学院/兵庫県神戸市)
緒方 しらべ氏 (総合研究大学院大学博士後期課程/大阪府吹田市)

INFORMATION

ミュージアムライティング



7月1日から8月31日までの日程で網走商工会議所によりライトアップが行われました。

ライトアップにあわせて網走ミュージアムライティングコンサートが開催され、7月4日(日)にはケーナ(笛)の笠谷俊一さんが、8月21日(日)には、Jazz&ポップの村上実沙紀さんとKaNa☆さんが出演され大勢の観客でにぎわいました。

行事報告

◆7月24日(土)、8月7日(土)に「はくぶつかんクラブ土器づくり」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。



◆8月1日、7日に「モヨロ人の世界展示説明会」を開催しました。

◆8月2日～6日に「オホーツク土器型ストラップづくり」を開催しました。

◆8月8日(日)に「シンプル織りもの」(講師：齋藤玲子学芸主幹)を開催しました。

◆9月19日(日)にてんとらんど大感謝祭にブースを出しました。



収集評価委員会

9月2日に資料収集評価委員会を開催しました。

今年度の委員は次のとおりです
津曲敏郎 (北海道大学大学院教授)
岩崎まさみ (北海学園大学教授)
手塚薫 (北海学園大学准教授)
甲地利恵 (北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員)

北方民族博物館だより No. 78

平成22(2010)年9月30日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
<http://hoppohm.org>
指定管理者
財団法人北方文化振興協会